
その日の空は晴れていて

くずりんご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その日の空は晴れていて

【コード】

N0976I

【作者名】

くずりんじ

【あらすじ】

どこにありそうな風景、毎日続く平凡な日常。けれどその日は少し違っていて……。夏の合間に挟まったほんの少しの非日常の物語。
空想科学祭2009参加作品です

第一部

「大丈夫に決まってるだろ。今回は絶対成功だ」

薄暗い部屋の中、やけに自信たっぷりな少年の声空間に膨らむ。

「その言葉何回聞いたことか。だいたい危なすぎるよ、前なんて小屋一つふっ飛ばしてたじゃない」

少年の声とは反比例に、返ってくる言葉は後ろ向きで少年を非難する声色も隠そうとしない。

「吹っ飛んだんじゃない。ゲートの向こう側に行つたんだ、大丈夫今回はあんな事故も起こらない」

少年が口にする「ゲート」と呼ばれるものは、小屋の半分を占拠するつぎはぎだらけの機械のことで、どこが安全なのか少女は何度でも尋ねるつもりだった。

これをどの視点から見れば安全だと勘違いできるのか、少女にはわからない。

「よし！ システムも良好、不具合なし、完璧だ」

「完璧って……」

後ずさりする少女の手を、パソコンの画面から視点を外すことな少年は器用に探し当てぐっと握った。

「行くぞナツミ、ジョージ・ウエルズもびっくりな時間旅行に連れてってやるよ」

暗闇を明るく照らすほどのきらきらとした少年の瞳に気をされて、ナツミを呼ばれた少女は強張っていた肩を、力なく落とした。

その日の空は晴れていて

2010年、夏。

強烈な太陽の日差しを反射するアスファルトの下を、健気にも汗を垂らしながら歩く人々を彼らの頭二つ三つ高いアパートのベラン

ダで洗濯物を干しながら、高たかしな科歩はため息を吐く。

本当なら自分はアスファルトが熱を吸収しきらない時間帯を選び、今頃学校の教室で炎天下の中グランドで汗を流す運動部員達を、窓の棧に手をかけながら眺めていただろう。

なのに今現在、こうして未だ自宅のおんぼろアパートで洗濯物を干しているという事実。

この事実は同時にこれから数分後には、自分も炎天下とアスファルトの放射熱に身をさらさねばならないという、考えただけでもうんざりな未来も裏付けていた。

「父さん！ いい加減早くご飯食べてよ」

ベランダから狭い部屋に顔を突っ込み、歩は叫ぶ。古い畳の上にある古いちゃぶ台に並べられたご飯を、箸が進まない様子の不精髭と寝ぼけた顔が際立つ父がそこにいた。

「アユム、叫ばないでくれ酒が抜けてないんだ」

「うるさい。誰のせいでこんなことになってると思ってるの」
「はいはい。わかったから先に行ってる。と箸でちよいちよいとドアを指さす父に、歩はカチンときて父の顔面にバスタオルを投げ込み、鞆を拾ってさっさと大げさに倒れる父の前を通り過ぎ、すとんと腰を畳に落とした。

そして紫色の髪留めをポケットに突っ込んで、写真立てに微笑みかける。

「じゃあ面倒な父は家に残して私は学校に行ってきます」

今日も晴れですね。

小さく笑った歩の視線の先には、今は亡き彼女の母親がガッツポーズを浮かべて満面の笑みを浮かべていた。

「おはよう。アユム……どうしたのなんか酷い顔だけ」

理科棟三階の一番奥の物理実験室に勢いよくドアを引いて現れた歩を、出迎えた背の小さなお下げの少女は、大きく顔をしかめながら一歩後ずさる。

「暑いッ！」

鞆を黒板の前の大きな机に置きながら歩は、全力でお下げの少女に一言を投げかけた。

「まあそうだけど、いつも一番に来るのになんで今日は遅れたの」

「……わかんない？」

ああ、先生のせいか。と苦笑いした少女に、歩はむすつとして返事もせず机の上に転がっていたうちわを扇ぐ。

「部長。おはようございます」

「山内先輩もおはようございます」

そう言いながら入ってきた数人を皮切りに、ぞろぞろと後輩たちが黒いカーテンをくぐって教室になだれ込んできた。

一年生が十二人に対して部活内で最上学年の二年生はたったの三人。歩たち二年生が少ないのではなく、一年生が例年に比べて多いのだ。科学研究部と銘打っている部活は歩たちの先輩達が引退してから人数不足で、一時は廃部の危機にまで陥った。なんとかそれだけは回避しなければならないと、春に新入部員勧誘を多少派手にやったところこのようになかつてない大所帯になってしまったのだ。

「ミホ、水島くんはどこにいるの？ 鞆はあるけど」

投げっぱなしになっているパンパンに膨らんだエナメルの鞆を目で差しながら、歩は美帆に尋ねる。すると美帆はまた苦笑いを、小さな顔に浮かべ開けっ放しの窓の外を指さした。

「来てすぐに網とカゴとつなぎに着替えてどっか行っただちゃったよ」
深く溜息を吐き歩は頭を抱え、濃い緑色の裏山に遠い視線を向ける。残り一人の同級生である水島亨みずしまとあるは陽気でおしゃべり好きな男子なのだが、いかんせん無類の虫好きであり、生命が色づくこの時期は特に制御不能になることが多々あるのだ。

「まあいいや、水島くんのご事は放つとして私たちはやることやるうか」

今朝の父親の件といい、今日は異性とはかみ合わない日なのか。と漠然と考えながらも、仕切りなおそうとイスから腰を上げた時、

慌てた声と喧しい足音が廊下から教室に飛び込んできた。

「高科部長大変だ！」

汗だくで飛び込んできたのは、まぎれもなく水島亨のその人で歩は思わず顔をしかめる。

「ミーティングにも顔を出さないで虫取りとはいいい度胸じゃない、ねえ水島」

「え、今日ってミーティングだったっけ？　ってそんなことは後でいいから、部長ちょっと着いて来て！」

にやりと意地悪そうに笑う美帆の言葉に若干同様しながらも、水島はすぐに苦い顔をしている歩に必死な視線を送る。

「変なことは止めてよ。ほら前もスズメバチの幼虫はうまいとかまずいとか……」

「あーもう、そんなんじゃなくてとにかく来てくれ！」

手を握られぐいぐいと引かれるままに、歩はすぐにいつもと違う雰囲気を手のひらを通して感じ、美帆にその場を任せ水島に導かれるまま廊下を突っ切り、再びギラつく太陽の下を駆け抜けて行った。

裏山の入口は校門を出てすぐの所にある。

山の中へ続く古いアスファルトの上には、横の茂みから濃い緑の蔓が伸びてきていて思わず歩は顔をしかめた。

このぼろぼろのアスファルトだって目の前の緩やかに曲がるカーブの先はなくなって砂利道になってしまふ。日差しは天然の緑のトンネルによつて幾分弱まるかもしれないが、それでもこんな暑い日にしかも亨と一緒に山に登る意味は、歩にはわからない。

「水島くん、一体何があったの。私帰りたんだけど」

「いやそれがさ」

きよろきよろと辺りを見回して誰もいないことを確認すると、亨はそつと歩に耳打ちした。

「人が倒れてたんだ。中腹辺りで」

なぜか目を輝かす亨とは反対に、疑いに満ちた眼差しを亨に向け

る。

「水島くん帽子被ってないよね」

「まあそうだけど」

「暑さにやられたんじゃないの。何だったら保健室までついていてあげよ」

まったく信用されていないと知った亨は、大げさに肩を落とすが次の瞬間には歩の背後に回り込み、細い背中を突き飛ばす。

よるめく歩に向かって、指を突きあげ亨は高らかに宣言した。

「絶対いたんだ。これが本当なら大変だろ、さあさつさとのぼるのぼる」

ほんとにいたなら私連れてくる場合じゃないでしょ。という歩のぼやきも、太陽の日差しと蝉の声の間で溶けて消えていってしまった。

全身汗だくになりながらも数十分歩いて二人がたどり着いた場所は、ちょうど中腹辺りの道から僅かに外れたところにある「五代樹」と地元の人から言われる大きなクヌギの木の下だった。

キョロキョロと四方を見渡す亨を尻目に、歩は手の甲で額の汗を拭って五代樹を見上げる。

ざわざわと揺れる豊かな緑色の葉が適度に日差しを遮り、地面にまだら模様を浮かび上がらせている。

「おっかしいな。この辺にいたはずなんだけど」

何やってんだかと肩をすくめながら、五代樹の根元に腰かけた。

街中とは違った優しく穏やかな風が、歩の頬を撫でてて肩で切りそろえた髪を音もなく揺らす。

両手を後ろについて目を細め、葉の隙間から青い空を垣間見ようとしたその時、誰かのうめき声が聞こえ歩は慌てて振り返った。

五代樹の裏側には大人一人が入れるほどの大きなウロがあり、声はその中から聞こえてくるようだ。中腰の姿勢のまま五代樹を半周

した歩は、一回咳ばらいをすると勇氣を出して穴の中に声をかけた。
「だ、大丈夫ですか」

「何やってんの。五代樹の穴の中には入らない方がいいぞ変な噂があるし」

「誰がいる。声がするの」

背後から聞こえてきた亨の足音は、歩が言葉を告げると急に慌ただしく近づいてきた。

「大丈夫ですか、救急車呼びましようか」

携帯をポケットから取り出して119を押そうとした時、暗闇からにゅうつと腕が出てきて僅かな時間宙をさまよい、やがて歩の細い腕を掴んだ。

「平気です。もう大丈夫だから」

そう言いながらウロの中から一人の少年が文字通り這い出てきた。学生服を着た小柄な少年で、あちこちに土と葉をくつつけている。ぼさぼさの前髪を掻きながら現れた少年の顔は、どうみても平気とは言えなくらい真っ青だ。

「この人だよ俺が見つけたの！」

「無理はしない方がいいですよ。具合悪そうだし」

自分の腕を掴んでいる腕にそつと手を添えながら、歩は明るいところへ全身を出してきた少年を見た。

「大丈夫大丈夫。ちよつと酔っただけだから」

「酔った？」

乗り物酔いにしては近くに車もないし第一ここには入ってこれないし、お酒の酔いつても少年からはアルコールの臭いは全くしない。

少年の言葉は信じられず眉をしかめたのがきつとバレたのだろう少年は焦ったように拳動不審になり、あははつと何かをごまかすように笑う。

「ところで何でこんなところで倒れてんの。五代樹のとこなんてよほどの変わり者しかこないよ。虫しかないしな」

隣で若干傷ついた表情を浮かべる亨を見て見ぬふりして、歩は少年に尋ねる。同時に添えていた手に力を入れ、逆に少年を捕まえた形に持つていつて少年の逃げられないようにする。
考えてみればみるほど、この少年怪しすぎるのだ。

一瞬、三人の間に沈黙とそれぞれの思惑が交差する。

そして三人ともそれぞれの行動に移るのに、枝から離れた葉が地面に着く速度よりも速かった。

まず亨がウロの中をのぞき込もうと身を乗り出すが、少年に思い切り突き飛ばされもんどりうって倒れる。そのごたごたの間に、歩が掴んでいた少年の腕を引っ張り体勢が崩れたところに馬乗りになり、少年の身動きを封じた。

「あー、くそ」

完全に動けないことがわかると少年はぐったりと全身の力を抜きと地面に四肢を伸ばした。もう抵抗する様子がないとわかつてはいたが、馬乗りになったまま歩はほんの少し語調を強めて、下の少年に言葉を投げかける。

「名前は？」

「ツヨシ」

「こんなとこで何やってたの」

尋ねると、突然少年はあーとかうーとか唸って言葉を濁した。

「身元不明っぽいし警察に突き出してもいいんだけどな」

「わかった。言うよ全部しゃべるから放してくれ」

観念して音を上げた少年を笑っているかのように、五代樹の葉がざわめいて三人を包み込んでいた。

五代樹の前の開けた場所に座りこみ、歩は正面にいる少年の言葉を待っていた。隣には突き飛ばされた際に思い切り打った後頭部をさする亨がいる。

「まったく病人になんて扱いをするんだキミは」

「キミって言うな。アユムって名前がちゃんとありますから。それに酔ってるだけって聞いてたけど」

「おいおい誤ってキミ、じゃないアユムさんにゲロ吐いた欲しくないだろ？」

解放されたとたん饒舌になる少年を呆れたように歩はため息を吐いた。仮にも女の子にゲロだのなんだの、デリカシーの欠片もないやつだ。

「それでツヨシくんはここで何やってたの」

「あーそうだな。それを話すと長い時間が掛ってしまっただよな、ほら君たちあれだろ学生なら授業とかいかなくちやいけないだろ」

「下手な嘘つかないでよ。夏休みのど真ん中じゃない」

げつと表情を歪めるツヨシを見て、歩は内心首をかしげた。

もしかして本気で知らなかった。というのは信じられないが、ツヨシの焦っている顔が妙に印象に残る。

「あーもういいや。どうせボロがでるんだ全部話すよ」

なんの予兆もなく投げやりになったツヨシは両足を投げ出して、空を眺める。目を細めて遠い空を眺めていたツヨシの顔は比較的穏やかだったが、二人に視線を戻したとたん厳しいものに変わった。

「その代わり驚いたりするんじゃないぞ俺うるさいの嫌いなんだよ」
わかつたと頷く二人を確認すると、ツヨシはもったいぶって間を置いた後ようやく口を開く。

「俺ついさっきタイムマシンに乗ってこの時代にやってきたんだ」
静寂のあとその場を包んだのは、驚きの声でも感嘆のため息でもなく、二人分の深い溜息だった。

目の前の二人があたかも詐欺師を見るような、信用の欠片もない瞳で自分を見ていることにツヨシは憤慨し、バンツと地面を叩いた。
「なんだよその目は。お前らが教えるって言うからせつかく教えてやったのに」

腕を組んで背を伸ばし精一杯亨と歩を見下ろそうとするが、いか

んせん三人の中で一番背が低い為迫力が無い。組んだ足の上に肘をつけて、亨がツヨシににやにやとした顔を向ける。

「今時小学生でもそんな嘘つかないぜ、タイムマシンなんて作れないだろ何年経つてもさ」

言いきつた亨だったが、もう一度ツヨシに視線を戻すやいなやぎよつとして顔を肘から離れた。

まあ驚くのも無理はないだろう。突然ツヨシが腹を抱え、低い声で笑い始めたからだ。黙って二人のやりとりを聞いていた歩も、ツヨシの様子に多少の不安を覚える。

こいつ大丈夫だろうか。

歩と亨がそう考えたとき、ようやくツヨシが笑い声に言葉を混ぜ始めた。

「分かってない全っ然わかってない。そんな偏見のせいで人生の半分は損してるぜ」

今度は完璧に人を小馬鹿にした態度を二人に作って見せて、わざとらしく膝をつけて立ち上がった。

「わかったついてこい。いいもの見せてやるから」

自身満々意気揚揚と歩き出すツヨシの背中を、残された二人は困ったように見つめていた。

五代樹のウロの中に入ると神隠しに会う。

という都市伝説というか、毎度おなじみの根も葉もない噂があるのはこの辺りの住人や近くの学校の生徒にとっては当たり前のことだ。そうでなくても街の匂いは薄くなり、濃い緑が精力を増す場所に進んでやってくる人など数が知れている。

だから、というわけではないが実は歩が五代樹の前にやってきたのはこれが生涯二度目だ。しかも前回はまだ幼い時に両親ときたので当時の記憶はひどく曖昧で、記憶の隅で埃をかぶっている。

でもこれだけははっきりと言えるだろう。

以前来たときにウロの中は絶対に、鈍色に光ってなどいなかった。

目の前の光景を信じられずに、歩は無意識のうちにウロの中から
一歩後ずさる。それとは対照的にツヨシは得意げに鼻を鳴らす。

「どうだ。これで信じたる俺はこれをくぐってきたんだ。しかもこ
れ俺一人で作っただぞ」

言葉を無くした二人の表情を眺めてにやりと笑うツヨシはとても
満足そうにうなずく。

「いや、得体のしれないものってのは分かる。なんだったらツヨシ
のこと信じても構わないけどさ。ツヨシはどっちからきたんだ」
「どっちってなんだよ」

驚いたままの間抜け面をなんとか修正しながら亨が、やっと視線
をウロの中でうねる鈍色の光から引き剥がし、頭の上にハテナマー
クを浮かべるツヨシに向けた。

「過去か未来かってことさ」

「言えないね。どっちにしてもこの時代や俺の時代に影響を与える
ことになるから俺はこの時代の情報には絶対に触れないし、俺の時
代の情報も君達には与えない。タイムトラベラーとしてはこのくら
いの倫理は守らないとね」

自称タイムトラベラーは胸を張って答えると、急にしおらしくな
って二人にすり寄ってきた。

「それはそれとしてこの時代の初めての友人のお二人にお願いがあ
るんだけど……」

ああ、これは非常に面倒なことだ。

何故ツヨシが用件を話し始める直前に直感し、その直感が外れる
気がしなかったのかは歩にはよくわからなかった。

ただひとつ言えることは、ほんの少し常識から外れた夏の一日が
始まったのはきつとこの瞬間からだったということだ。

第二部

太陽はいよいよ絶好調になり、頼んでもないのに張り切ってさんさんと日差しを降り注いでくれていた。

歩は左腕にはめた腕時計をチラリと見て、不機嫌な顔のまま熱気に満ち満ちたコンクリートの上を歩いていた。横では青いタオルを首から下げた猫背気味の亨がいて、あーとかうーとか唸っている。

「今何時くらい？」

「二時半。十分ごとに聞かないで、それよりちゃんと見ててよね」
二人の間の会話も短く、さらに力がまるで入っていない。

それもそうだ。この炎天下の中、好きでもないお使いを無理やり頼まれたのだ。やる気が出ている方がどうかしているだろう。

「緑色のセーラーにポニーテールだっけ、特徴少なすぎるだろ」

「じゃあなんでふたつ返事で引き受けちゃったの」

ぶつぶつと文句を言う二人は裏路地や電柱の影などに視線をやりながらだらだら歩いている。

ツヨシからの依頼は同行者を探してほしいとのこと。タイムトラベルしている最中にタイムホールとやらの中ではぐれてしまったらしい。

またタイムホールの出口は一つだけらしいから他の時代に弾き飛ばされた可能性はなく、確実にこの時代、この付近にいるらしいのだがツヨシ本人は余計な情報を目にしたくはないから五代樹の前から離れたくないそうだ。

仲間がいなくなったにせずいふんと冷静すぎて少し冷たい印象を歩は受け、自分で探せと言いたくなくなったが、それより先に亨が了承してしまい今の状況に至っている。

亨が依頼を引き受けた理由は簡単、ツヨシの「見つけてくれないこととしてあげる」の一言に釣られたからで、それならば亨だけがやればいいのにこうやって歩まで付き合わせれていた。

学校近くの、毛細血管のように入り組んでいる路地はさながら迷路のように視界を遮り、通いなれた道なものになぜだか歩の胸の奥が不安で膨らんでいく。昔ながらの背の低い平屋が坂道に沿って続き、各家々と狭い道を仕切る壁がほんの僅かな影を作っていた。

車一台がやっと通れるような道は、いつもの通学路からほんの少し外れただけなのにどこか知らない土地にきたような気分させるのだ。

「水島くんは信じてるの、ツヨシくんがタイムトラベラーってことポツリと歩は呟いた。二人の間にあつた沈黙のおかげで、小さな声でも容易に聞き取れる。車の走る大通りからはもう結構外れていった。

「信じてるっていうか信じたいのかな。だって面白そうじゃん」
能天気と言う亨は笑っている。

「高科部長はどう？ なんとなく信用してなさそうだけど」
「出会ってすぐに信じられるわけないでしょ、内容がないようだし全然信じてない」

「高科さんらしいや。でも面白そうじゃんタイムマシンなんてあつたらどの時代に行きたいとか考えるでしょ」

行きたい場所。

一緒に生きていきたい時間。

会いたい人。

歩の頭にその三つはすぐに思い浮かぶ。でもだからこそ、それらを思うことが愚かなことだと分かっていた。

熱気のせいかほんの少し胸が苦しくなる。急に黙り込んだ歩を亨はチラリと見下ろした。その視線に気づいた歩はほんの少しだけ顔をあげて、背の高い亨に微笑んでみせた。

「よくわかんないな。だってありえないことだもの」
「じゃあなんで自分はここにいるのだろう。」

心の中に問いかける声に、歩は答えることができなかった。

「水島くんはこの辺詳しいの？」

本日八回めの曲がり角を曲がったとき、歩が亨に尋ねる。歩の家は学校や五代樹のある裏山から離れているのでこの辺りの地理は最低限しかわからない。正直今自分がどこを歩いているのかさっぱりだ。

「まあ小さい頃からよく自転車で駆けまわってたからね」

「やっぱアウトドア派だったんだ」

幼少の頃が想像通り過ぎて、歩は言葉に笑みが混ざり込む。

「高科さんって意外によく笑うんだな」

「意外ってなによ」

「なんか高科さんって男っぽいつていうかしっかりしてるイメージがあったからさ、ちょっと新鮮だ」

同性の中でも背が高い方で仮にも一つの部活の部長を務めているのだ。亨が口にした印象は持たれて当然だろう。別に否定することでもないの、歩はそうと言って会話を流す。

その時だった。

チリンと隣の家屋から風鈴が一つ聞こえた。

また一つ、もう二つ、やがて二人を包み込むように幅の広い風が後ろから吹きつけて、風鈴の音が一直線に空を駆け抜ける。

その音を追いかけた先に、彼女はいた。

風と音の延長線上。影と日差しの狭間に、ポツンと一人立ち尽くしている。

緑色のセーラー服が僅かにはためき、髪の毛が静かに揺れている。まるで二人が立っている場所と、決して入れない世界の間立っているような儚さを少女が纏っているようで亨も歩もしばらく動けず、その場に固まってしまふ。

するとふいに少女の方が二人の方を音もなく向く。数秒後、元気の良いはきはきとした声が風鈴の音の残響を弾き飛ばしながら、二

人の元に届いた。

「すいません！ ちょっといいですか」

探し人は向こうから二人に向かって駆け寄ってくれたのだ。

駆け足で近付いてきた少女は二人の元にたどり着くと、真剣な表情のまま口を開いた。

「学生服着て背の小さい男子見ませんでしたか。ちょっとはぐれてしまったみたいで」

「もしかしてツヨシくんのことですか」

歩が逆に尋ねてみると、少女は二三回瞬きした後何か気づいたかのようにあつと声を上げて、歩の手を掴んだ。

「そうです！ ツヨシです。その人どこにいるのかわかりますか」

「ええ、ちょうどあなたを探してたんです。すごくラッキーですよ」

まさかこんな簡単に見つかるとは思っていなかっただけに、自然と歩の口調も弾んだ。

「案内します。ついてきてください」

そう言った亨に少女が、ありがとうほんとに嬉しいと笑った顔に妙なデジャブを感じたがその時の歩にはその感じの正体に気づくことはできなかつた。

少女はアツミと自ら名乗った。

アツミは明るく前向きで、最初に感じた儂い雰囲気とはまるで真逆の性格をしていてまた同学年ということもあり、三人が打ち解けるのにそう時間はかからなかつた。

「アツミさんもツヨシさんと同じ時代から来たんですね」

「そうね。でもいつから来たかとかは聞かないでね、ツヨシに教えるなって来る途中にキツク言われてるから」

片目をつむりながらおどけるアツミに、亨はぎこちなくうなずく。そんな様子を眺めながら歩はじつと黙り込んでいる。

「どうかしたの」

「いやぁ本当にタイムトラベラーっぽいかなって」

「なんだまだ疑ってたのか」

亨の声に歩はむうと唸る。

胡散臭いツヨシがタイムトラベルしてきたというより、アツミがタイムトラベルしてきたという方が不思議と説得力があるがこれはおそらく本人たちの性格と出会い方の印象の差だろう。また確かにツヨシとアツミは知りあいらしいが、決定的な証拠がない。

なんだか他の科学研究部にドッキリでもされているのではないかという疑念が、歩の頭の中から消えないのだ。

「まあ当たり前でしょうね簡単に信じられるものじゃないもの。私だって未だに違う時代に来てるって実感ないし」

右端で笑うアケミはひどく呑気なもので、知らない場所さらに知らない時代で普通一人きりされたら不安で堪らないのだろうが、こうして顔に笑みを作っている。

「でも……この辺りは違うなぁ」

彼らの言葉が本当だとしたら、彼らは未来から来たのか過去から来たのか。

歩と亨には知る術などないが、アスファルトを電柱に張り付いている張り紙に順番に顔を向け、そして空を見上げて目を細めたアケミの瞳の中は何かを懐古しているかのような色に染まっているようだった。

第三部

三人で五代樹の傍に戻ったとき、時間はもう四時になろうかとしていた。夕暮れまではまだ早い。木々に覆われた五代樹の周りの拓けた場所は適度に過ごしやすい環境になっている。

五代樹の大きな根っこに体を預けてごろんと横になっているツヨシの姿が、すぐに目に入ってアケミがツヨシの名を呼んだ。

「ツヨシ！」

アケミの声に反応して、ツヨシがゆっくりと体を起こした。

「よかった心配してたんだよ」

ツヨシの前に座り込んで胸をなでおろすアケミだったが、ツヨシが顔を伏せたままなのに気づいて首を傾げる。

「どうかしたの？」とアケミが尋ねると、ツヨシがぽつりと口を開いた。

「アケミ、悪い」

「え？」

「ゲートが閉じちゃった」

さっと重い空気が空間を支配した。

すかさず亨が五代樹の裏に回り込んで、ウロの中を覗き込むがウロの中はぼつかりと黒い闇が口を開けているだけで、鈍色に波打っていた光はもう消え去っている。

「ない。何にもない」

重苦しい声が五代樹の向こうから聞こえ、歩は改めてツヨシに視線を送った。ひどく落胆しているようで、力なくうなだれた腕はぴくりとも動かない。

自信満々でどこか偉そうだった少年の姿は、もう垣間見ることさえできない。

「誤作動が起きてシステムエラーが起こってゲートが一時的に閉じたんだ。多分復旧するだろうけど、その時ここに穴が通じるとは限

らない。仮に通じたとしてもゲートが開いている時間は最低でも日が暮れるまで。時間が足りなさすぎる」

間を開けて、本当に悪い。とツヨシは再び呟いた。

同時に沈黙が訪れる。ツヨシはもちろんアケミも歩も亨も、口を開くこともできずただ自分の立っている場所に釘付けになったような錯覚に捕らわれてただ立ち尽くすだけだ。

風が二、三回五代樹の葉を揺らした時、ようやく歩が口を開いた。「ゲートってこの町に開くの」

「ああ半径五キロメートルくらいに抑えきれるかもしれない。でもどうしても誤差が生じてしまう。同じところに開く可能性の方が少ない」

「つまり山の中だったり、ビルのとっぺんだったりする可能性もあるってことだよな」

「それだけじゃない。下手をすれば空の上だったり木の幹の中だったりする」

亨の声に覆いかぶせるように絶望的な言葉をツヨシが並べる。

「でも可能性がないわけじゃないだろ」

なんとか亨が希望的な観測をしようとするが、当のツヨシはもうすべてを投げ出しているかのように口元につすら笑いを浮かべて首をふった。

「限りなくゼロに近い……お手上げだよ」

再度の沈黙が四人を包んだ。

その沈黙を破ったのは、短く震えるアケミの声だった。

「諦めるのはまだ早い。そうでしょ」

「……悪い」

「まだ早いつて言いなさいよ!」

唇を噛んでさらに深く俯いたツヨシの胸倉をぐつと掴んで、アケミは叫んだ。置いてけぼりを食らっても笑っていたアケミの豹変ぶりに、歩は驚いてアケミの肩に手を掛けてツヨシから引き剥がそう

としたが、アケミは構わずツヨシに叫ぶ。

「まだ帰れないって決まったわけじゃない。そうでしょ、じっとしてる暇があったら立ってゲートを探せばいいじゃない!」

「何にもわかってないな! いいかい、いくら詳細に事前にポイント設定しても地球は時速1400キロで自転してる、おまけに設定したのはこの時代じゃない。なんの誤差もなしに手の届くところにゲートが現れるのなんて不可能なんだよ」

鼻がくっつくほど顔を近づけて睨みあう二人だったが、ついにアケミが手を離し無言で踵を返し、歩き出した。

「どこに行くんだよ」

「そこにいなさいよ。私はゲートを探すから、私は諦められない」
振り返らずにそう言いきったアケミは一人、姿を消してしまった。
残された三人の内、一番に動き出したのは意外にも亨で立ち上がりながらまだ動けないでいたツヨシに質問を投げかける。

「ツヨシ、ゲートってのはあの光のことだよな。あれって実際どんな形してるんだ」

「……空中に形成されても地面や壁に形成されても水を床にこぼしたみたいな歪な形してる」

「了解。高科さん俺部活のみんなに協力してくれるように頼んでみる」

歩が頷くのを見届けると、亨は勢いよく走り出してすぐに姿を消していった。

これで残されたのは二人だけ。

何をすべきかはわからない。しかし何ができるかは歩は知っていた。

「ツヨシくんみんな行っちゃったよ」

返事はない。予想通り。

「アケミさん怒ってたよ」

また返事はない。これも予想していた。

「でも、一度もツヨシくんのこと責めなかったよね」

ぴくりとツヨシの肩が動いた。歩は静かに言葉を続ける。

「タイムマシンを造ったツヨシくんはすごいけど、でもここで諦めないって前を向いてツヨシくんを責めずにアケミさんもすごいよ。何よりも強いと思う」

言いきってから、ツヨシに背を向け歩は歩き始める。その途中で歩を止め、振り返り言葉を丁寧に投げかける。

「私は信じる。アケミさんとツヨシくんがタイムトラベラーだってだから協力するよ、絶対にゲートを見つげるから。だってほら友達でしょ」

スカートを翻して歩が去り、最後の一人が残されたこの場所はひどく静かだ。ツヨシは五代樹の手に広げた葉々をぼんやりと眺めて、ぼつりと口から言葉を吐く。

「……カツコ悪いな」

ツヨシの声は、さざ波のような葉の音にあっという間に飲み込まれ空気の中に埋もれていってしまった。

陽は傾き、眼下に広がる町並みはうつすらと夕陽に染まり始めていた。山道を駆け降りる歩の右手には色が変わりつつある太陽が、歩の心を焦らせる。足が絡まないように注意しながら砂利を蹴りあげて、踏んずけて、ある人の背中を指して走り続けた。

息はあっという間に切れてしまい、顎が自然に上を向いて速度が落ちそうになるがぐつと堪えて歯を食いしばって前を見据えた。

砂利道がアスファルトに変わったちようどその時、肩を落として歩く人の背中が現れ歩は大きな声でその人の名前を呼んだ。

「アケミさん！」

「歩ちゃん」

振り返って立ち止まったアケミの目の前で急ブレーキをかけ、肩で大きく息をしながら歩はなんとか声を絞り出す。

「て、手伝うよ。ゲートを探すの」

「ありがとう」

にこりと笑みを作ったアケミとその「ありがとう」は張りぼてのようにつきはぎだらけで、夕日に照らされていたアケミの瞳には堪えても堪え切れないほどの涙が浮かんでいて、歩は言葉を失った。歩の表情を見て、アケミは苦笑した。その拍子に一筋の涙が瞳から零れおちる。

「あーダメ。水島くんの時はい慢できたのに」

ぼろぼろと音もなく零れはじめた涙は夕陽を反射して鈍く光り、とても綺麗だ。しかし涙が流れるアケミの顔に浮かぶ笑みは、歩には見るに絶えないほど痛々しいものだった。

あの時ツヨシを怒鳴りつけたアケミが本当の彼女なのか、出会ったときに感じた儂い雰囲気のアケミが本当の彼女なのか、それともこうして気持ちを押し殺して笑っている彼女が本当の彼女なのか歩にはわからない。

ただ不思議なことに、お互い顔を合わせてたった数時間しか経っていないのにこれじゃいけない、何かを変えなければならぬと確信していたのも事実だ。

「大丈夫だから。探しに行こう、走ろうか」

先に駆けだしたアケミに向かって、歩は叫んだ。

「私の前だったら泣いてもいいよ。出会ってちょっとしか経ってないけど、同じ時代時代の人じゃないけど、でもだからこそ私の前なら無理して笑わなくても構わないから！」

アケミはくるりと身軽に半回転して、とんとと両足を地面につき歩の方に向き直る。

「言ったでしょ。もう大丈夫、でもありがとね」

夕陽が眩しくて、眩しすぎてやけに明るい声の主が一体どんな顔をしていたのか歩は知ることができなかった。

半径五キロ以内の範囲をただ闇雲に探すというのではさすがに無策というわけで、部員たちと落ち合った亨と連絡をとり、裏山を

中心として北側と東側を美帆と亨などの部員達が探し、西側をアツミと歩が搜索することになった。

残る南側を探せる人数はおらず、そこにゲートが現れないことをただ祈るだけだ。

学校にいったん戻り自転車を引っ張り出すと荷台にアツミを乗せて歩は勢いよく学校から飛び出して、坂道を下っていく。生ぬるい風を全身に受けながら二人はあちこちに視線を配らせる。

ゲートは普通の生活していたらまず見ることな出来ない特殊な色彩だ。もし人目に着くところに出現したら騒ぎにもなるだろう。

視覚、聴覚、吸覚、肌に触れる風さえからも情報を得ようと歩は必死に意識を集中させる。自分達が繋ごうとしている望みは糸よりも細く小さなものだ。

それでも前を向く。

嘘だろうと強がりだろうと泣いていようと後ろに乗るタイムトラベラーは、大丈夫と笑ったのだ。だったら後は時が来るまで足掻くだけだろう。

自然と歩のペダルを踏む足やハンドルを握る手に力が入る。

そして歯を食いしばりながら歩は強く祈った。

どうか、奇跡が起こりますようにと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0976i/>

その日の空は晴れていて

2010年10月9日19時05分発行